

2013 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 15:00~16:00 60分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。



一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

どこからどこまでが流言飛語であるというふうには、はっきりした区画を与えることは困難であるが、この流言飛語という言葉自身、例えば風評とか噂とかいうものとは違って、もつと異常なスリルを感じしめるもののように思われる。確かにそれは社会生活において普通にあるものではなく、いわば或る程度までアブノーマルなものである。まず流言飛語はアブノーマルな報道形態として規定することが出来る。これを一種の報道として考え、一般の報道と結びつけて考察するということは、人々が流言飛語について云々する場合に広く採用する方針である。

ところが報道との関係において流言飛語を考える場合は、報道の生命が何よりも客観的な真実性にあるところからして、当然否定的な評価を下さざるを得ない。けだし公表せられもせず何人も接したこともない事実を報告する限りにおいて、不可避的に真実との距離即ち虚偽の性格を持つものとして現れねばならぬからである。流言飛語は報道の一つの形態として見られる時、正に報道の生命たる一点においてその信用を失うのを如何ともなし得ない。だが流言飛語を単なる報道の一種としてのみ取り扱うことは決して適当な見方ではない。それは更に世論の一種として、アブノーマルな世論の形態として理解される必要がある。この側面は今日までほとんど常に看過されていたところである。⁽¹⁾だが何故人々はこの側面を看過して来たのであろうか。それには流言飛語の文法について語るところがなければならぬ。

まず報道の文法的形態はいかなるものであろうか。「某政党総裁は今晚二時半脳溢血のためにキュウセイした。」⁽²⁾これが報道の模範文である。主語は一般に三人称である。時は過去である。しかし過去がそれ自身報道されるのではなく、この過去から生ずると考えられる結果即ち一定の未来のために報道されるのであり、またそのために読まれるのである。報道の文法的形態が過去であるにもかかわらず、未来への期待というものが生きているのでなければならぬ。

ところで世論の模範文はどうであろうか。「我々は某法案の撤回を要求する。」これが世論が命令する文法的形態である。ところでこの文章において主語は一人称であり、普通は複数である。世論と呼ばれる以上、それは個人のものであってはならず、多

数の社会成員に共通なものであることを必要とする。だがしかし共通の見解が世論として現れるためには、かえって不一致が前提されていないなければならない。何かこの見解に対立する見解があつて、これと戦うことが予想されている時においてのみ世論は世論として具体的なものになるのである。それは対立するものに対して戦う自己というものはつきりと示さねばならぬ。また世論は人間が環境の作用に応じて営むところの反作用或いはこれへの要求であり、報道が外から来るものであると反対に、人間主体から発して外に向うものである。主語はどうしても一人称とならざるを得ない。しかもその内容は実現されているものであるよりは今後において実現さるべきものに属する。もしも実現されているならば世論は敢えて活動する要を見ないのである。その上この実現を阻もうとする力なり意見なりが存在しているのである。そこでそれは「要求する」という如き語を含まねばならぬ。

報道と世論とがその文法的形態において著しく異なるものであることは最早何人も疑わぬであらう。それならば流言飛語の文法的形態はいかなるものであらうか。「某政界総裁は今暁一時半自殺した。」これが流言飛語の模範文である。流言飛語と報道とをその文法的形態において区別することは、双生児の何れが兄であり何れが弟であるかを識別するよりもっと困難である。それは何等の差異も持っていないのである。報道の場合には脳溢血となつており、流言飛語の場合は自殺となつておるだけのことであつて、その形式は全く同一である。このように両者が文法的形態において全く同一であるという事情こそ、人々をして流言飛語を一種の報道として即ちアブノーマルな報道形態としてのみ考えさせる原因である。そしてまたこれこそ流言飛語が真実性を欠くものとして評価される所以である。だが流言飛語の文法が報道の文法と同一であるからといって、前者を後者の一種としてばかり考えるのはヒソウのそしりを免れない。それは何故であらうか。

或るお客がお菓子を持参したとしよう。お客が帰つてしまつてから、子供が「このお菓子は太へん美味しそうね」と言つたとする。この言葉は、言うまでもなく一つの報告の形式を備えている。しかし単なる報告ではないのである。そこには「このお菓子が食べたい」という要求が隠れているのである。自分を主語とする要求の言葉をお菓子とする報告の言葉に変えているのである。それならば何故率直に要求しないで、わざわざ報告の形式を採用するのであるか。それは安んじて要求を提出し得る

ような条件が与えられていないと信ぜられたからに外ならぬ。もしこの条件を無視して要求を提出したならば、或いは子供は「行儀が悪い」という叱責に出会わねばならぬかも知れない。そういう危険が予想されるのである。危険を予想しながら要求を提出するのは決して賢明な処置とは言えない。危険はただお菓子が貰えぬことを意味するだけでなく、更に叱責なり罰なりを受けることを意味するからである。

流言飛語が常に報道の文法を守っているところから考えて、これを報道の一種とばかり見るのが誤っていることは、以上の例からしても理解されるところである。世論が一定の条件の下に報道の形式を取って現れることがあるのである。そしてそれが流言飛語として通用することがあるのである。世論の模範文は「我々は某法案の撤回を要求する」というのであった。主語が一人称であること、「要求する」というような語が用いられること、それが文法的特徴であった。だが社会には法律があり制度があつて、一定の框を越えた人間行動を禁じ、これを敢てするものに対しては刑罰をもって臨むことになつてゐる。これは社会が存立する上から見て当然のことであり、正当なことである。人間は様々な要求を抱く。その中にはもしこれを公表したならば即座に恐ろしい刑罰をこうむらねばならぬようなものもある。これを主張し要求する時、ただにそれが通らず或いは容れられないうというのみでなく、かかることを主張し要求する人間そのものが罰せられるという場合がある。罰せられぬまでも非難をこうむるといふ場合は多い。そういう時に「我々は……要求する」といふ形式をもって要求を表現するものは稀である。だが表現をやめても要求はそのまま消えるものではない。あるものはついに現れずにはやまない。要求は形式を変じて自己を表現する。フロイトの精神分析学において言われるように、或る種の欲望はその充足のみならずこれを表現することをも社会的秩序によつて禁圧され抑制されているために、人間の無意識の中に沈殿し他の形態をもつて現れるものとすれば、ちょうど同じような過程がここに見出されるのである。

そこで世論の形式は捨てられて報道の形式が採用されるのである。「我々」が失われ、「要求する」が消える。一転して報道の文法が守られるのである。我々は二つの潜在的世論を取り出して見よう。その一つはさきに見た某法案反対の世論が未だ潜在的な段階にとどまっている場合の姿であると仮定しよう。同業の友人から友人へと各自の意見と要求とが伝えられていた段階のもの

のと考えて見よう。この時それはやがて公の舞台に世論として登場することが出来るであろうという自信と予想とを伴っている。そう大きな声で語り合うことはないかも知れない。しかしそれは周囲を憚^{はば}つてであるよりも、むしろ低声で十分に事足りるからである。それぞれ率直に自分達の要求を正に自分達の要求として語り合い伝え合うに相違ない。今はまだ我々の間だけである。しかしやがてこれは壇上から叫ばれるであろうし、新聞にも発表されるであろう。つまり公共的なものになるという期待があるのである。こういう予想なり自信なり期待なりがあるのは、自分達の要求を要求として提出することが何等法律上の規定を犯すことにならぬという確信が支配しているからである。今一つの潜在的世論はこれと異なる。そこにはやがて公然の顕在的世論になるという予想も期待もない。恐らくこういう考えは我々の間を動き回っているだけであつて、これを壇上から叫ぶ機会はないであろうし、活字として発表される日も来ないであろうと考えている。だからそれは密かに低声をもって伝えられる。前のものにとつては潜在的形式は一時的の住家であり、間もなく見捨てるに相違ない仮の宿である。ところがこの後のものにおいてはこの潜在的形式が一切であつて、これ以外に自己の住むべき家はない。それは永久に顕在的形式に浮び上がることが出来ないのである。

それならこの二つの潜在的世論の間にはただ一方はやがて顕在的になるのに他方はいつまでも潜在的であるという差異しかないであろうか。そうではない。この差異が文法的形式の変化に現れるのである。遠からず顕在的になるという自信のある潜在的世論においては何人も「私は……を要求する」という形態を避けようとはしない。避ける必要がないのである。しかるに永久的に顕在的になる見込のない潜在的世論においては最早この「私は……を要求する」という形態を採用するものはない。元来安心して話すことの出来る人々に伝えるのであろうが、甲が乙を信頼して自己の要求を伝えるにしても、乙はまた丙を信頼してこれを語り、更に丙は丁を信頼してこれを伝えるであらう。その時丁はこの要求が甲の要求であることを知っているのである。丁が甲にかねて悪意を抱いて陥れようと考へていることもあろうし、或いは治安の維持に任ずるカ⁽⁵⁾ンリであることもあろう。甲がゼッカ⁽⁶⁾によつて刑罰その他の不幸をこうむらねばならぬのは既に明白である。だからこの種の潜在的世論においては一人称を主語として用いる形式はどこまでもこれを避ける。「要求する」という語も同時に失われる。そしてもしも要求が実現されたなら

ば生ずるであろうと考えられる事実、この事実が報道の形式をもって述べられるのが普通の形態である。

要求の内容をAとする。この要求が通った時に生ずると考えられる結果をBとする。やがて顕在的になるという自信のある潜在的世論においては「私はAを要求する」という形態が採用される。ところがこれに反して顕在的になる見込のない潜在的世論にあつては「Bがあつた」という形態が用いられるのである。これが最も簡単な道筋である。「Bがあつた」という形式を用いているなら、それは何と言つても報道である。要求という要素はなかなか発見出来ない。しかしそれはもう流言飛語である。流言飛語の常として「Bがあつた」というだけでなく、「……という話である」、「……というさうだ」などという語がこれと結びついている。語り伝える場合には一々用いられていなくても、問いつめれば、きつと出て来るに違いない。こういうふうにして要求を提出する人間は、自ら要求を提出しながら責任を免れることが出来る。その代り要求としての迫力は弱められざるを得ないのであるが、それでもはつきり要求を提出して刑罰をこうむることに比較すれば、否、要求を自分の胸の中だけに収めて黙っていることに比較すれば、まだ我慢出来ることである。だが既に報道の形態を備えている以上、これが報道の一種として取り扱われても、報道の生命たる客観的真実性を標準として裁かれても、もうこれに抗議を申し込むことは出来ない。

(7)

「私はAを要求する」と言う代りに「Bがあつた」と言うのは一つの形式である。その他にはこういう形式がある。世論は多くの場合何かアクチュアルな問題を中心として構成されるものである。けれどもこれは毎日報道されるすべての事実が世論の題目になることを意味するのではない。世論の基礎にはやはり一つの一般的な見方というものないしは一般的な意欲というものがある動いていると考えられる。そしてこれが或る報道と結びついてこれを機会として自己を実現するということが考えられる。某大官が脳溢血のために急死したという報道が現れた時、彼が死んだのは本当は自殺であるという流言飛語が町角から現れ始めたでしょう。この流言飛語の中には少なくとも一つの潜在的世論が含まれていると見てタイカないと思う。それはこの大官を代表者とするとその政治的勢力の敗退を喜ぶところの見方である。この政治的勢力はかねて大衆の要求と正面から対立して今までも色々眼に余ることをやって来たとしよう。数日前の新聞はこの一派の先頭に立つ某大官と或る大規模な疑獄との密接な関係

を報じていた。その矢先である。或いは本当に自殺であるかも知れない。しかし新聞にはそう書いてない。どこまでも脳溢血と

というのが報道である。自殺であるという流言飛語は、某大官の肉体的生命の喪失に先立つ社会的ないし政治的生命の喪失を主張且つ要求するものであり、それは更にこの大官を中心とする政治的勢力の没落を欲求しているのである。

なお幾つかの形態があるであろう。しかし要求が報道の形式において現れるということは基本的な意味を持っている。潜在的な世論が顕在的なものに高まるといふ過程にはほとんど無限な難易の程度がある。それは勿論問題もちろんとなつてゐる事柄から分析的に導き出されるものであるというよりも、その間に介入する社会的な秩序というものとの関連において総合的に理解さるべき性質のものである。

(清水幾太郎『流言飛語』による)

注 フロイト……オーストリアの精神医学者で、精神分析の創始者。

〔問一〕 傍線(1)「だが何故人々はこの側面を看過して来たのであろうか」とあるが、その答えとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 世論と流言飛語とはその客観性において著しく異なるから。
- B 報道の文法形態は、主語が三人称で、時制が過去だから。
- C 流言飛語の文法について誤解して考えられてきたから。
- D 流言飛語は極めてアブノーマルな世論であるから。
- E 流言飛語は報道の文法に従っているから。

〔問二〕 傍線(2)(3)(5)(6)(8)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問三〕 傍線(4)「一定の条件」とあるが、その内容としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A その世論が人々を法律や制度が許容しない行動に駆り立てることが予想される場合。
- B その世論を唱えると非難されたり処罰されたりする可能性がある場合。
- C ある種の欲望の充足が社会的な秩序によって禁圧され抑制されている場合。
- D 法律の条文によって、それに反する行動が禁じられている場合。
- E その世論が人々の支持を得られないことが予想される場合。

〔問四〕 空欄(7)には次のア～エの文が入る。どのような順序で並べて入れるのがもっとも適当か。左のA～Hの中から選び、符号で答えなさい。

号で答えなさい。

- ア ところどころか自分で伝えた報道を自ら打ち消したり愚弄ぐろうしたりするような態度を取ることがある。
- イ 自ら語り自ら打ち消すのは、出来るだけ責任を逃れようとするためであると共に、「私」というものを自分で抹殺してしまったために、それが何か自分とは独立な客観的なものと見える錯覚に基づくのでもある。
- ウ 「私」というものはどこにもいないのである。
- エ 「……という話だが、まさかそんなこともあるまい」という如きがそれである。

- | | | | | | | | |
|---|---------|---|---------|---|---------|---|---------|
| A | アーウーエイ | B | アーウーイーエ | C | イーウーエーア | D | イーアーウーエ |
| E | イーエーアーウ | F | ウーアーエーイ | G | ウーエーアーイ | H | ウーエーイーア |

〔問五〕 「流言飛語」とは、本文の筆者の考えによれば、どのようなものか。「世論」、「報道」、「公表」という三つの語を用い

て三〇字以内で答えなさい。(句読点は一字に数える)

〔問六〕 次の文ア、オのうち、本文の筆者の考えと合致しているものはA、合致していないものにはBの符号で答えなさい。

ア 報道の時制が過去だということは、未来への期待を表現する上で重要な役割を果たしている。

イ アブノーマルな報道は、その報道の主体を自ら打ち消すことにより、アブノーマルな世論として顕在化できる。

ウ 反体制的な世論であっても、アブノーマルな報道に形を変えれば、活字として発表することが可能になる。

エ 流言飛語の時制は過去であるが、報道とは違って、そこには未来への期待というものが生きていなければならない。

オ 流言飛語の文言から要求を直接的に読み取ることができない。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

人間とは、地面に立っている誰もが思い浮かべるあの形のことではない。蟻塚、蜂の巣、ミミズが排泄した土、それらを作るのでなく、作りつづける、そういうことをしつづけるのがそれぞれの生き物だと考えたちよūdとそのとき、私は歩いていた街が、それをつくるためにした行為の集合体に見えた。たとえば塗装を仕事にしている人は、ビルや民家の壁を見たとき、私が新聞記事を読んで、「通りいっぺんの書き方だ」と思ったり、「感傷的すぎる」と思ったりするように、「ムラがある塗り方をしたもんだなあ」と思ったり、「こんな塗り方じゃあ長くもたない」と思ったりするだろう。ということは、その人は壁を見て壁を塗っている人の手つきが見えている。それがその人にとっての「人間」だ。手つきが浮かんで「ムラがある塗り方だ」と思うとき、その人は作業の成果を評価しているのではなく、自分の手つき・行為の未来への投げ送りをやっている。なんだかハイデガームたいな思わせぶりの造語だが、それをした人の手つきが思い浮かんでいるときの感覚は評価ではない。自分で何もしない人には評価としか聞こえないだろうし、手つきを思い浮かべた本人でさえも、自分はいまこの仕事の評価をしたとカン違いしているかもしれない。

しかし、「手つき」が思い浮かぶのはそれをする人だけだ。それにつづく「ムラがある塗り方だ」とか「通りいっぺんの書き方だ」とかの言葉は、すでに「手つき」まで届く想像力、というよりも、自分の体から発した行為と直結する記憶のようなイメージのようなものからは乖離している。私が新聞記事でも何でも、すべての文章を読んで、いろいろな感想が出てくるのは、その文章をどこかで(頭か体のどこかで)自分で書く呼吸で読んでいるからだ。

とすると、出てくる疑問は、新聞記事ならある程度我慢して読みつづけられるのに、小説となると、ホントにもう一ページも読まずに、退屈したりつまらなくなったりして投げ出してしまふのはどうしてか。

小説を書くのは小説を読むのより頭を使うとか実感としては頭を押す感じで、その頭を押した力が消えないまま小説を読むむからよつぽど(変な)小説でない物足りない。そこに私はあらかじめあると思われている小説の言葉・小説の文章に自ら進

んで入っていくのと全然違う、小説（の文章）を書くことの試行錯誤を感じる。

私がこの「試行錯誤」ということを最初に思ったのは、パブロ・カザルスの、バッハの『無伴奏チェロ組曲』を弾いているときに聞こえる、弦の上を指が動いてこされる音と弓が弦に触れる瞬間の音楽になる一瞬間の音だった。どちらもノイズというところだが、私はこれを最高級の蓄音機でSPレコードを再生してもらって聴くと、奏者と楽器が自分がいまいるまったく同じこの空間にいると感じられるほどリアルという以上に物質的で、その音からブルースが聞こえた。

弦の上を指が動いてこされる音や弓が弦に触れる瞬間の音はだからノイズではない。その音が弦楽器を弦楽器たらしめ、チェロをチェロたらしめる。カザルスが弾いた音の中にブルースの響きまであったのではなく、そのこされる音の中にカザルスの演奏がありブルースもあった。弦楽器が譜面 \parallel 記号で再現可能な行儀のいい音の範囲を出るときに、奏者の指も体もそこにあらわれ、肉声もあらわれる。そこからブルースも響き、ジミ・ヘンドリックスのギターも生まれ出る。

カザルスの演奏は彼に先行した弦楽器を鳴らした人たちの試行錯誤と一緒に鳴らす。すぐれた奏者というのは、自分に先行した楽器をいじった人たちの試行錯誤を鳴らす人のことで、「歴史」や「記録すること」が人間の営みの中心だと思っている人は、「カザルスの演奏からは彼に先行した人たちの試行錯誤が一緒に響く。」

と、歴史に名を残す人 \parallel 特異点を主にした言い方をし、私もまたそのような言い方はかりを子どもの頃から浴びて育ってきたために、ふだんはついついそういう言い方をしてしまうのだが、

「先行した人たちの試行錯誤の厚みの中からカザルスの演奏が響く。」あるいは、

⁽²⁾「先行した人たちの試行錯誤の厚みがカザルスの演奏を響かせる。」

という言い方が、きっと本当のところだ。

表現や演奏が実行される前に、まずその人がいる。その人は体を持って存在し、その体は向き不向きによっていろいろな表現の形式の試行錯誤の厚みに向かって開かれている。「これがいい演奏だ」「これがいい文章だ」と言われて、自分の体がすでに知っている（というのは、うすうす気づいている）試行錯誤の厚みに関心を持たずに、(3)に自分をしたがわせたなら、模

傲や縮小再生産しか生まれず、教育というのは本質的にそういうものでしかないが、「これがいい演奏だ」「これがいい文章だ」と言われても、自分の体がすでに知っている試行錯誤の厚みに忠実であろうとしたら、

(3)

との軋きみが起こる。

それが弦の上を指が動いてこすれる音だ、というのはあまりにベタな比喻だが、表現というときに私がいつもそこに立ち返るのは事実であり、これがこういうことを考えるイメージの源泉とか起源になった。

人は、作品、演奏、表現されたものというところ、「完成」ということを考える。雑に言えば、完成形が百点満点で、この作品は八十点ぐらい、こっちは六十点ぐらいという考え方を。しかし、表現することにおいて完成はない。「どこまでいっても完成しない」ということでなく、完成という考え方は、出来事や行為の結果から考える考え方なのだが、出来事や行為には現在という時点から前に向かうプロセスしかない。あるのはプロセスだけで、完成やそれに類する言葉でイメージされる運動がそこで終わる状態がない。

ひたすら無限に伸びてゆく線みたいなものだが、線が伸びるといふ運動のプロセスだけがあるとしたら、「無限」という言葉さえ消えるのではないか。「そんなことを知っている必要はない」という意味だと、とりあえずはしておくこともできるかもしれないが、表現することを試行錯誤ということから徹底して考えたとき、作品が完成するというイメージが生まれてきた言葉にはしばらくは敏感になつていなければならない。

(保坂和志「弦に指がこすれる音」による)

注 SPレコード……音楽などを録音した円盤。

〔問一〕 傍線(1)「自分の手つき・行為の未来への投げ送りをやっている」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 行為を未来のある時点において振り返ってみるといふ仮定をしている。
- B 行為は未来においてはじめて意味をもつものになるといふ考え方をする。
- C 行為は未来において完成するという考えを拒否し現在に完成を見ようとする。
- D 行為は自分では評価できないとして未来の人々の評価に任せようとする。
- E 行為には現在からつねに先に進んでいく過程しかないと考える。

〔問二〕 傍線(2)「先行した人たちの試行錯誤の厚みがカザルスの演奏を響かせる」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A カザルスの演奏家としてのすぐれた点は、先行した演奏家たちの試行錯誤の苦勞を聴衆に思い出させることにある。
- B カザルスがすぐれた演奏をできるのも個人の力量だけではなく、先行した演奏家たちの試行錯誤によるところが大きい。
- C カザルスのすぐれた演奏といわれるものも、先行した演奏家たちの試行錯誤を模倣することによって成り立っている。
- D カザルスのようにすぐれた演奏家は、先行した演奏家たちの試行錯誤さえ自分の演奏に取り入れる能力をもっている。
- E カザルスはすぐれた演奏家で、先行した演奏家たちの試行錯誤を響かせることにより、自らを際立たせることができる。

〔問三〕 空欄(3)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 独自の演奏
- B 流行の演奏
- C 既成の形
- D 超絶技巧
- E 倫理的規範

〔問四〕 傍線(4)「弦の上を指が動いてこすれる音だ、というのはあまりにベタな比喻」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 模倣すべき形式が、伝統的に作られてきた弦楽器の形状をじかに連想させてしまうので。
- B 軋みという現象を弦に指がこすれる音と表現すると、両者のつながりあまりに直接的になるので。
- C 自分の体で知る試行錯誤の厚みを弦の上を動く指の音と表現すると、前者が持つ意味が薄まってしまうので。
- D 表現者の体と指の動きを直接的に結びつけているので。
- E 弦の上を指が動いてこすれる音という表現は、あまりに現実そのままでありイメージが広がらないので。

〔問五〕 次のア～オについて、本文の筆者の考えと合致しているものにはA、合致していないものにはBの符号で答えなさい。

- A 完成をめざして演奏家が努力しつづけることこそ、尊い芸術創造のあり方として評価できる。
- イ 「名演奏」は確かに存在するので、それに対して賛辞をおくる素直さを評価しなければならぬ。
- ウ 誰かの演奏を「最高の名演奏だ」と賛辞をおくることは、作品を完成品とみなしてしまうことである。
- エ 教育の本質は、既存の形式に従わせながらも、独自性のある想像力を身に付けさせることにある。
- オ 演奏者が弦楽器をうまく鳴らすためには、ノイズをたくみに排除しなければならぬ。

三 次の文章を読んで、後の間に答えなさい。(30点)

わたらせおはしましぬる所は、池ひろう澄みて山なだらかにたちめぐり、よろづの木草ども植ゑわたして、時は卯月の十日ばかりなれば、水際につつじ咲き乱れ、こずゑに藤の花かかりて至るままに、すなはちかの鳥のこと思ひ出ださる所のさまなり。あるつとめて、茂樹とふたり南に向かひたるひさしに出でるて物語らふに、若楓の朝露に濡れてなよなよと広がり伏したるに、雀の寄り来て木伝へば、露こぼれて枝のふと上さまに起き返るに驚きて、ちちと鳴きて飛びていぬるもいとをかし。「まろはよべ子四つばかりに、かの鳥の初音聞きつ」と茂樹が言ふを、「日ごろいぎたなきに何をか聞きまがひつらん」と弄して笑へば、顔少し赤めて、「いな、このむかつをのならのこずゑかけて、二声まで鳴きていにしものを」とうち腹立つ。「いぎとき夜居の僧ならましかば、かかることをもつくづくと聞き集めなまし」とあらがへば、いたくいきまきて「耳なし山には鳴くともかひなし。いでやこのまこといつはりは御前にてこそ定めてめ」とて、うち連れ出でたれば、つつましげに少しうちそむきておはしましなから、「何ごとぞ、つとめてよりかしがましつるは」と問はせ給ふ。かうかうと啓すれば、今はえ念せさせ給はで、笑はせ給ひながら、「まことは、いましてちがすき心の深き浅さを試みばやとて、さるわざにかしこき者に言ひおきて、かのならのこずゑに登せて彼が声をいとうまねび似させつるは」とのたまふに合はせて、さしも赤みこりつる茂樹が顔の色青葉になり、口をさへ引きふたぎて簾のそば押し出だして、すべり出でんとする袖をとらへて、「耳なし山のぬれ衣は今こそ」(2)と笑ふほど、思ひがけぬ雲間より、さしあてたるやうに、一声高く名乗りて過ぎぬるには、たれもたれも諸声に「あは」と言ひて沓も履きあへず御庭にまどひおりぬ。

(4) 聞くや聞かずのあらそひもならのこずゑにいまこそはなけ

「ものあらがひ今はよもせじ」と笑はせおはします。

(本間游清『雑詠百首歌』による)

注 茂樹……伊予吉田藩に仕える筆者の同僚。 子四つ……午前零時三十分ころ。 むかつを……向かい側にある丘。

御前……伊予吉田藩主夫人伊達満喜子。

〔問一〕 傍線(1)「いざとき」の反対語を本文中から探し出して答えなさい。

〔問二〕 空欄(2)に入れる語句としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A かはきぬれ
- B かさねけめ
- C さづけなむ
- D すすぎたる
- E ほころびつる

〔問三〕 傍線(3)「さしあてたるやうに」の意味としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A みすかしたように
- B あてつけがましく
- C まっすぐ響くように
- D しっくり似合う様子で
- E ねらいすましたように

〔問四〕 歌中の空欄(4)に入る鳥の名は何か。すべてひらがなで答えなさい。

〔問五〕 傍線(5)「ならぬこずゑにいまこそはなけ」に用いられている掛詞の組み合わせとしてもっとも適当なものを左の中から

選び、符号で答えなさい。

- A 「檐(なら)」と「無」
- B 「梢(こずゑ)」と「来ず」
- C 「今」と「居」
- D 「こそ(助詞)」と「来」
- E 「鳴け」と「泣け」

〔問六〕 この文章と同じ季節の歌を左の中からひとつ選び、符号で答えなさい。

- A 木木の色の移れる池にうく鴨かもや時雨もしらぬ青葉なるらし
- B ひぐらしのなく山里のゆふぐれは風よりほかにとふ人もなし
- C 春ふかみ青葉まじりのこずゑよりなほ花おもふみよしの山
- D かすみだに山ちにしばしたちどまれすぎにしはるのかたみとも見む
- E けふこずはあすは雪とぞふりなましきえずはありとも花と見ましや

